開催地名：岐阜県川辺町	
開催日時	令和 4 年 1 月 26 日（水）　15:05～15:55
開催場所	川辺中学校
語り部	神谷未生　　（岩手県大槌町）
参加者	川辺中学校生徒　265 名程度
開催経緯	大規模災害を経験していない志太支部管内消防団においては、必ず来るとの教えのもと、事前の準備はしているものの意識・技術を含め、更なる情報源が必要と考えています。
内容	（1）岩手県の被災当時の状況 岩手県は本州の中で面積が一番大きい県である。岩手一つで四国がまるまる入るほどの大きさがある。よって、同じ岩手と言っても、エリアごとに地形条件は大きく違う。東日本大震災当時は、この違いが強みにも弱みにもなった。海沿いのエリアは軒並み被災。しかし、海に面していない市町村は比較的被害が少なかったため、震災後支援はそちらが中心となって行われた。 大槌町は海から 3 キロも離れた地域だったので、住民に津波が来るという意識は薄かった。しかし、リアス式海岸の特性が災いして、山のほうであっても津波被害で亡くなられる方がたくさんいた。海は近くなくても、川から逆流してくる水もある。川の近くに住んでいる場合は、災害時にどう逃げるかの意識作りが大切である。 大槌町では、たまたま点検のために来ていた「はまゆり」という観光船が民宿の上にどっかり打ち上げられて、それが被災の象徴的なシンボルとなった。それぐらい、大きな津波が押し寄せた。また、大槌町では、地震と津波と火災の三つが複合して起きてしまったことも、被害が大きくなった理由である。人口の約 10%が一瞬で命を失った。 （2）地震による地元経済への影響 大槌町では、商業地浸水率が 98%を記録した。これは、会社や商売をしている、大槌町で経済活動をしている土地のほぼ全てが被害を受けたという意味である。こうなると、災害からの復興はより遅れることとなる。 また、町役場の被害も大きかった。旧町役場で災害対策本部を立ち上げたことによって、15mの津波を受けて、139 名いた役場職員のうち、3 分の 1 にあたる 39 名が一瞬で命を失ってしまった。さらには、集会を開いていたために、幹部レベルの職員も多く命を落とした。そのため、復興を取り仕切

	る人がほとんど残らなかった。 (3)「逃げる」ことのシミュレーション ひとくちに「災害から逃げる」といっても、実際はとても難しいことである。逃げるためには、どこに避難するのかを知らなければならない。避難所を知っていても、徒歩か、車か、どういった手段でそこまで行くのか。さらには、家族が家に取り残されているとしたら、どうするか。 災害時には、99%の命が避難所にたどり着く前に亡くなっている。しかし、逆に言えば、避難所にたどり着きさえすれば、何とかなると言える。逃げなければならない場面で、しっかり逃げること。それが自分を、ひいては他人を助けることにもなる。
開催地より	避難場所を知っているだけでは、実際に災害が起きたときに逃げることが難しいと感じた。どうやって逃げるかということを含めて学ぶことで、今まで以上に災害の対策を行っていきたいと思う。